

[謡曲の謡い方術語]

先ず、謡い方術語には、用いられる曲目によって、同一の言葉でありながら非常に意味が違っている事を心得ねばなりません。

例えば、『松風』 ロンギのサラリと、『田村』 ロンギのサラリは全然違います。

この両曲は、位において根本的な差があります。

一つは三番目物、殊におつかしい曲であるのに対し、一つは修羅物ものの中でも少し容易な部におかれています。

同じ言葉のサラリであっても、大分差があるものと考えねばなりません。

(イ) 確カリ

位をとって謡うことです。

カを入れてどっしりという風に理解しがちですが、例えば、『井筒』、『定家』など『確カリ』したのですが、カを入れてどっしり謡われたらたまりません。

この意味は、『位が確カリ』、つまり重いという方に解釈すればよいのです。

又、『老松』も確カリ謡うといえます。

どこまでも落ち着いてだれぬように位をとって謡うということです。

又、脇能のワキの次第、詞など確カリといわれます。

これは、『運びのある確カリ』というので、むしろサラリともいえます。

いずれにしても位をとるということです。

(ロ) スラリ

サラリよりもやや緩やかということになります。スラリにはテンポだけでなくもっと複雑な意味があります。

声調、節扱い、ノリといった、地の要素の複雑さと比例します。

「スラリメ」というのはありますが、「極くスラリ」というのはあり得ません。

閑かでもよいところを、一歩進めて「スラリメ」に謡うということになります。

(ハ) サラリ

字の通り、サラリということで、あまり位をとらず謡うことです。

高砂の役のようなものをも、サラリという言葉で説明しています。

しかし、それはあまりだれぬようにとの意で、清らかな滞らぬ位ということです。

聞く方で曲柄を弁え得る能力が必要です。

(ニ) 静カニ

これも、字の通り解釈すればよいのです。

確かに静かに、静に更に、いろいろ変えられ用いております。

やはり曲柄を弁えて考える言葉であります。

(ホ) カカッテ謡う

勢って謡うというような意になりますが、勢っては多少荒くなるというような意が含まれますが、これは荒くならぬよう、のりかかって謡うという意です。
全て、シテなりワキなりが相手の物語に感心した時、又は、自分の語っているところを、一層もってもらしく聞かせようとする時にこの謡い方を用います。

(ヘ) カケテ謡う

これは、前の謡へかけて謡うという意味です。
相手の謡の最後の字へ一緒になるように謡い出すところです。
例えば、『松風』の「いで参ろう」とシテが謡うと、最後の「う」の字の終らぬ中に、ツレが「あら浅ましや」と謡うようなところ、初動の前のシテ、ワキ、ツレなどの一句一句の懸合いのところは、皆この謡い方をします。
又、句の第一字を前句の第八拍に当てて謡い出すのも「かけて」といいます。
何れも間がぬけては困ります。

(ト) 抑へテ謡う

声は張った高い調子でも、外へ、派手ならぬようにおさえて謡う意で、重い曲柄になると全部この技巧を必要とします。

先ず、謡をやるに当っては、その曲が何番目ものであるかを知り、その中でもどの辺におかれているかを見定め、更に内容は現在ものか、怨霊ものか、或は、恋慕、哀傷に属するものであるかを考え、しかるのちに『サラリ』なり『確カリ』なりの程度を決めて解釈しなくては駄目です。

